

「Miksi」学ぶ初の教育研究大会を開催へ

フィンランド教育もとに、新たな人材育てる研究スタート

「問題解決能力を引き出す」「個性を伸ばす」と高い評価を受けているフィンランド教育を学ぼうと、東川町教育委員会は6月4、5の両日、フィンランドから教育専門家2人を招いて、初の「フィンランド教育研究大会」を開きます。町教委では、これを機に相互教育交流を広げ、創造的なキャリア人材を育てる東川方式の新たな人材育成メソッドの研究を始めます。



トウモロコシ県小中学校を視察（昨年9月24日）

ガスアラ、セイヨナキ、ロバニエミ、各市などを回って、保育園から大

ラム2016における学習及び学校環境支援グループ」代表のコイブラ・ピリヨさん、学習と指導のためのセンター（Onerva）指導教員のオヤ・シルバさん2人を招き、講演とシンポジウムで詳しくフィンランドの教育事情を聞く予定です。

「なぜ？」が自ら考える力を鍛える

フィンランドの義務教育は、7歳から16歳まで9年制の無償教育。年間授業日数は、日本に比べて40日少ない190日ほど。塾もなく、校外、家庭での勉強時間も少ないといわれます。

にもかわらず、OECD（経済協力開発機構、本部パリ）が世界41カ国の15歳を対象に行った2003（平成16）年のPISA（学習到達度調査）では、化学、問題解決能力、数学、読解力4分野で世界トップとなりました。

同調査は、詰め込み教育の成果ではなく、学んだ力をどう使えばいいのか、という能力をみるもの。学習で得た知識を課題にどう応用して対応することができるか、を測ります。問われるのは自分で考える力。この年、日本は総合5位でした。

このように高い問題解決能力の結果が出た原因は、「Miksi」（ミクシ）と呼ばれる教育方法だといわれます。

「なぜ？」「どうして？」を問い詰めて論理的な思考、物事を細かく客観的に見る力を養うことで、自ら考える能力を鍛え、応用力を養っているといわれます。

5月20日、幼児センターの今年の畑づくりが始まりました。年長さんの幼児がみんなで種まきました。この畑作りも今年から「はたけの教室」と名付け、食育教育としての位置づけが明確になりました。「なぜ芽が出るの？」「どうして大きくなるの？」「食べられるの？」という子供たちの「なぜ？」に答え、自ら作ったものを食べる、ということを学ぶ取り組みがスタートしました（10頁参照）。

自分で考え、生きる力を身に付ける。フィンランドの教育システムについて、遊びを通じた社会体験、成功・失敗体験を小学生のうちから学び、自然に社会で生きる力を養っている、などと評価される場合が多いといわれます。

そのため東川町教育委員会は、生きる力を養うという教育システムを学び、町のキャリア人材育成の教育実践システムとして取り入れたい、と本年度から検討を始めました。その先駆けとして、町教委は昨年9月、フィンランドの教育事情を探るため、国家教育委員会、ヘルシンキ、カン

視察しました。

「『なぜ』と問いかけていく教育が学ぶ意欲を高めている。東川でも町のキャリア人材育成のシステムに取り入れたい」（林万里教育長）との思いを強くして帰国しました。6月4、5の両日、農村環境改善センターで開く「フィンランド教育研究大会」には、フィンランド国家教育委員会教育相談役で「教育カリキュ